



TITLE:

人は推論的意味をどのように理解
するのか：「参照点起動の推論モデル」
に基づく発話の含意の分析

AUTHOR(S):

林, 宅男

CITATION:

林, 宅男. 人は推論的意味をどのように理解するのか：「参照点起動の
推論モデル」に基づく発話の含意の分析. 言語科学論集 2009, 15: 1-28

ISSUE DATE:

2009-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/141353>

RIGHT:

人は推論的意味をどのように理解するのか

—「参照点起動の推論モデル」に基づく発話の含意の分析—¹

はやし たくお
林 宅男

1. はじめに

語用論は、コミュニケーションにおける言語形式の認知的、社会的、及び文化的側面を様々な言語レベルで機能的に究明する研究分野である(Verschueren 1995: 1)²。その研究の源流は、20 世紀の初頭における Charles Morris、Rudolf Carnap、Charles Peirce 等による哲学研究に遡ることが出来るが、それを言語学の一分野として発展させたのは、後の、Austin (1962)、Searle (1969)、Grice (1975)らの「日常言語哲学者」(ordinary language philosophers)の研究である。その目的は、従来の真理値に基づく論理学的意味ではなく、コミュニケーションにおける発話者の意図的意味や、その伝達及び解釈のメカニズムを解明することであった。一方、認知言語学は言語の意味と構造を人間の一般認知の能力と経験的知識に照らして解明しようとするもので、言語の範疇化、言語構造の機能、言語と思考の関係などをその主な研究対象とする(Geeraerts 1995: 111)。認知言語学は、文法は深層の意味構造によって規定されるという考えに基づいて Lakoff (1971)、Postal (1972)、McCawley (1976)等によって展開された 1970 年代の「生成意味論」(generative semantics)の基本的原理を継承するもので、Lakoff and Johnson (1980)のメタファーの研究、Lakoff (1987)のカテゴリー化の研究、Langacker (1987)のスキーマによる知識構造の研究等がその先駆けとなって、急速に進展してきた。

語用論と認知意味論は、アリストテレス以来の論理学的アプローチによる古典的な意味分析に異を唱えるもので、記号としての言語の意味を、世界との真理値的対応に求めるのではなく、言語使用者としての人間が伝達・解釈する世界を表すものとして分析する点で共通している。しかし、この二つは、前者が幅広い言語活動における意味表出と解釈のプロセスのダイナミックな側面に重点を置くのに対して、後者は一般認知能力に照らした概念的意味と言語形式の精緻な構造分析に焦点を当てる点で異なる。ここでは、両者を融合する新しいパラダイムとしての「認知語用論」(山梨 2001, 2009b, 林 2006, 林 2009, Hayashi 2009)に基づいて、語用論研究が明らかにしてきた幾つかの問題を認知意味論の観点から検討する³。以下、2 節では先ずこのパラダイムの理論的な背景について述べ、3 節では、それに基づく研究として、「参照点能力」(reference point ability)に基づく推論的意味の分析を示す。ここでは、特に、参照点に基づく推論的意味のメカニズムとプロセスについて、これまでの考察の内容(林 2006, 2009)をより深く詳細に検討すると共に、概念的観点からの分析を加えることによって、この研究パラダイムの妥当性と有用性を示す。

2. 認知語用論

2.1. 認知言語学と語用論

認知言語学は認知科学の一分野として、人間の言語活動にかかわる多様な現象を扱う。Lakoff (1990: 40-41)は、認知言語学の対象として、言語の全ての側面を支配する一般的原理を科学的に究明する「一般化研究」(generalization commitment)と、人間言語の説明を様々な分野における心と脳についての研究結果に一致させる「認知的研究」(cognitive commitment)の二つを掲げる。前者には、統語論、意味論の他に、発話行為、談話、含意、直示、文脈における言語使用を含む語用論が含まれ、後者が関係する研究には、文化人類学研究の他、意味生成と解釈のプロセスに関わる心理学、認知神経科学及び脳の計算メカニズムに関する研究が含まれる⁴。また、Geeraerts (1995)は、認知言語学を、語用論における一つの関連学問分野として紹介し、その研究内容は、機能言語学、心理言語学、談話分析といった分野と関連・重複すると指摘している⁵。

認知言語学と語用論が様々な点で重なりを持つことは、いままでの多くの研究が示している。例えば、認知言語学の創成期に行われた研究には、そのテーマや対象が語用論的なものが多い。その代表的なものが、Lakoff and Johnson (1980)のメタファー研究、Fauconnier (1985)の代名詞や名詞の指示・同定を扱った研究、詩における修辭的表現がどのように概念を表象し世界を構造化するかを示した Lakoff and Turner (1989)、Gibbs (1994)、Deane (1995)の研究である。また最近では、例えば、Turner (1996)、Stockwell (2002)、西田谷 (2006)のように、文学のテキスト研究を認知言語学の中の一つの下位分野として位置づけようとする動きもある⁶。その他、この種の研究には、広い意味で相互行為に関係するものも多くある。例えば、新しい概念が理解・表現されるプロセスを、異なる領域間のフレーム移行と概念混合という形で示した Coulson (2001)、会話者間の語の解釈の食い違いを「フレーム」(frame)や「放射カテゴリー」(radial category)の概念を使って分析した Lee (2001)、談話における話法とその「伝達動詞」(reporting verb)の時制の使い分けを「主体化」(subjectification)の観点から捉えた Sakita (2002)、談話の中で構築されるメタファーのダイナミックな生成過程を相互行為のデータを使って分析した R. Hayashi (2008, 2009)などがそれに当たる。更に、両者のインタフェースには語用論の概念を再検討したものや、語用論における理論そのものを批判的に扱ったものもある。これには、「遂行文」(performatives)を、「メンタルスペース」(mental space)の概念に基づき、「表象スペース」(representing space)から「被表象スペース」(represented space)に転写されることから起こるスペースの混合として分析した Sweetser (2000)、新グライス派語用論における含意(QI, RI)の真理値への関与の問題をスキーマとプロトタイプ概念に照らして検討した中村 (1993)、関連性理論における論理形式、発話の含意、法助動詞の認識的意味にかかわる問題を、プロファイルと認知ベース、スクリプト、「脱主体化」(decontextualization)の概念を用いて再分析した中村 (2002)が含まれる。

2.2. 認知語用論のパラダイム

上で述べたように、語用論と認知言語学は、言語使用と言語外の知識と機能を重視する点で共通している。ここで展開する認知語用論とは、言語使用のダイナミックな現象を、文脈との関係から包括的、多角的に捉える語用論と、人間の一般的な認知能力と言語主体の経験的基盤に照らしながら言語形式の概念的意味を厳密に分析する認知言語学の二つを融合する研究アプローチを指す(山梨 2001, 2009b; 林 2006)。その内容は大きく二つに分けることが出来る(林 2009)。先ず一つは、認知言語学の知見を語用論が扱う問題に幅広く援用し、一般認知能力に基づく統一的原理の下に語用論で扱う言語使用のメカニズムやプロセスの考察を深め、言語使用における概念的意味と構造についての精緻な分析を行うことである。すなわち、それは、語用論の扱う諸問題を認知言語学のアプローチによって分析することである。もう一つは、認知言語学が取り組んできた、語彙論、文法論を中心とする言語の範疇的・概念的現象の静的な分析を、知・情・意を含む包括的で動的な言語現象の研究へと発展させることにより、「認知言語科学」としての認知言語学を遂行することである。言い換えると、それは、認知言語学の研究内容と主張を、語用論が明らかにしてきた知見に照らして検討し、その理解を深めることである⁷。このように、認知語用論の特徴は、言語使用の背後にある一般認知の原理や、記号としての語や文の概念的意味と構造についての精緻な分析に関しては、あまり大きな関心を向けてこなかった語用論研究と、伝統的な概念的・指示的意味の研究に強く影響されもっぱら言語の構造に関する分析と言語理論の確立に偏りがちであった認知意味論研究を相互に補う点にある⁸。

3. 認知語用論の実践

3.1. 参照点能力と参照点構造

人は、経験に基づく具体的事象についてイメージを持ち、それをスキーマとして抽象化・構造化し、更には、その拡張化を通して様々な対象の表現や理解を促進させることが出来る。これは、人が持つ、基本的な一般認知能力の一つで「イメージスキーマ能力」(image schema ability)と呼ばれる。以下では、そのイメージスキーマ能力の一つである参照点能力を扱う。個々のイメージスキーマ能力は一種のカテゴリーを形成し、参照点能力のイメージスキーマ構造は、図1のように示される。この図は、認知主体(C=conceptualizer)が、関連する認知領域(D=dominion) (文脈)の中で、特に認知的際立ちを持つ参照点(R=reference point)を経て、その中にある目標(T=target)との認知的接触をするメカニズムを示している (Langacker 1993: 5)。

参照点能力は、一般認知における多くの事象の理解や行動のメカニズムに関わるだけでなく、多くの言語事象の意味をより統一的かつ正確に説明できる基本的認知能力であると考えられる⁹。Langacker (1993)は、参照点を多岐に亘る様々な概念的意味理解のプロセスに当てはめ、その汎用性と有用性を示している。それには、参照点とターゲットの関係づけが明白な属格表現(e.g. Sara's office, the back of the bus)の他、属格表現の派生元とも言える場所表現(e.g. Ce libre et á moi.)、制御の動詞(e.g. I have a

book.), トピック表現 (e.g. 「刺身はマグロがおいしい」)、提示的構文 (e.g. On the table sat a nervous calico cat.), 入れ子型場所構文 (e.g. Your copy of Women, Fire, and Dangerous Things is downstairs in the study in the bookcase on the bottom shelf next to the Illustrated Encyclopedia of Glottochronology.), メトニミー (e.g. The coach is going to put some fresh legs in the game.), 代名詞などが含まれる¹⁰。

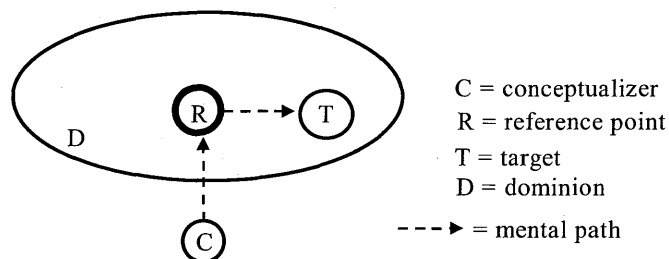


図 1. 参照点能力の構造 (Langacker 1993: 6)

参照点能力が働く際には、参照点とターゲットは、「概念的原型」(conceptual archetypes)と呼ばれる知識によって結び付けられるとされる (Langacker 1993: 8)。それは、日常の具体的経験に基づいて抽出される抽象的で基本的な概念的知識で、その内容は、それぞれのイメージスキーマや言語構造、更には個別の表現によっても異なる。例えば、属格表現では、所有(ownership)、血縁関係(kinship)、(特に体に関わる)物の全体-部分関係(part-whole relationship)といった概念的原型が参照点能力と結びつく¹¹。

3.2. 参照点能力の機能と言語表現の間接性

上で述べたように、参照点能力によって情報が表現・処理される場合には、当該の情報(ターゲット)が、それに関わる認知領域の中で特に特定しやすい情報(参照点)に依存して関係付けられ、その関係付けは、その領域に関する百科事典的文脈情報(概念的原型)によって可能になる。この能力が関与する多くの現象における情報の表現と処理のメカニズムは、参照点が果たす機能の内容は、言語現象によって必ずしも一樣ではない。まず、参照点による関係付けの機能内容は大きく分けて、ア)情報処理の促進と、イ)情報の同定、の二つのタイプに分けることができる(林 2006, 2009)。また、その間接性の程度は、参照点、ターゲット、及び両者の関係がどの程度明示的(直接的)に言語表現されているかの他、参照点がどのようにターゲットと関係付けられているかによって異なる。例えば、所有表現やトピック表現では、共に、参照点とターゲット(及びその関係づけ)に当たる概念は記号化されており、参照点の起動によって生じる機能はターゲットとなる情報の理解の促進であると言える。しかし、トピック

ク表現の場合、参照点として顕在化するのは、ターゲットとなる当該概念に直接結びつくものではなく、それよりも上位レベルのカテゴリーの概念であることから、ターゲットへリンクする機能は、より間接的であると言える¹²。また、メトニミーの場合、所有表現やトピック表現と違い、記号化されているのは認知的顕著性を持つ参照点のみであり、その機能はターゲットの理解の促進ではなく、(言語表現されていないターゲットの)同定である。この場合、認知主体は、参照点の概念から百科事典的知識を使ってその一部または関連概念をターゲットとして同定しなければならず、その関係はトピック表現の場合に比べて一層間接的である¹³。更に、その指示物が参照点と見なされる代名詞の用法では、ターゲットが(言語化はされていても)特定化されていない点で、その機能はメトニミーと同じで、同定である。ただし、代名詞の場合、メトニミーと異なり、参照点となるのは談話の中で述べられた何かの文脈の情報であり、明示的に述べられないため、その繋がりはいずれもより間接的である¹⁴。このように、参照点とターゲットの繋がり、その何れかがどの程度明示的に言語表現されるかによって、直接的なものから間接的なものへと連続性を持つ。その明示性が低くなるにつれて、参照点の働きはターゲットを同定するための「手がかり」(clue)としての機能を強めることになり、聞き手は、より多くの百科事典的知識と推論に依存することになる。このように、参照点が果たす機能は、言語現象によってその内容は同じではなく、その媒介の程度は間接性という点で連続性を持つと言える(詳しくは林 2006 参照)。

3.3. 推論的意味解釈と参照点分析

3.3.1. コミュニケーションにおける発話の推論的意味の本質と参照点

認知意味論が扱ってきた研究には、言語形式が持つ概念構造や概念理解の分析を中心とするものが多く見られるが、そのような理解の根幹を成すのは言語処理活動における脳の基本的機能を拠り所とする認知メカニズムである¹⁵。参照点についても、その基本的な機能は言語処理におけるターゲットへの、媒介(或いは繋ぎ)であり、その原理は、比較的静的で具体的な活動内容だけでなく、よりダイナミックで創造的なものにも当てはまる。前節で述べたように、参照点はターゲットにリンクする手がかりとしてその理解を促すだけでなく、ターゲットの同定を導く機能を持ち、後者の媒介的役割は、推論による意味理解のメカニズムにも働くと考えられる。本節では、特に推論的意味が参照点とどのような関わりを持つかという点をより明らかにするために、今までのコミュニケーションにおける日常言語の意味の研究を概観する。

コミュニケーションにおける言葉の意味の基本的な特性は Grice (1957)の指摘に遡ることが出来る。それはコミュニケーションにおける言葉の意味は、何かの「兆候」(signs)が表すような「自然的意味」(natural meanings)ではなく、何かの「合図」(signals)が表すような「非自然的意味」(non-natural meanings)であるという主張である¹⁶。非自然的意味を伝えるとは、話し手が発話によって聞き手に何かの「効果」(effects)を及ぼそうと意図し、且つ、聞き手がそのことを認識することによりその効果の達成を得ようと意図することを意味する¹⁷。これは、言葉の意味とは、その記号自体にある

のではなく、使用の場においてその記号に関係付ける（つまり参照する）ことによって得られたものであることを示したものである。言語の意味が言語記号以外のもののように結び付き解釈されるかの研究は、後に Grice (1975)が示した推論的意味解釈のメカニズムによって深められた。彼は、コミュニケーションにおける言葉の意味を、慣例によって記号に付与された「文字通りの意味」(what is said)と、記号に直接的には付与されない「含意された意味」(what is implicated)に大別し、後者のうち、特に推論的意味としての「会話の含意」(conversational implicature)（の生成と解釈）のメカニズムを、コミュニケーションが効率的に成立するための基本的ガイドラインとしての「協調の原理」(cooperative principle)とそれを具体化した、情報の、量、質、関連性、様態に関する「会話の公理」(conversational maxims)によって説明した¹⁸。その内容は、聞き手が、これらの会話のルールを前提に、発話の文字通りの意味から、文脈的知識を参照することによってその「言外の意味」を解釈するメカニズムとして捉え直すことができるものである。Grice が示した推論的意味解釈の基本的メカニズムは、その後、公理の数を縮小する形で改変や再考を加えながら多くの研究者によって引き継がれてきた。その主流的研究は、「新グライス派」(Neo-Gricean)の研究と¹⁹、「関連性理論」(relevance theory)(Sperber and Wilson 1995 [1986])に分けられるが、基本的には、前者は、Grice の「一般化された会話の含意」(generalized conversational implicature)（一般的な文脈的知識を手がかりに算出される含意）を、後者は、「特殊化された会話の含意」(particularized conversational implicature)（会話の場に特化された文脈をもとに算出される含意）を発展させたものと言える。

このように、推論的意味の研究は Grice (1957)以降様々な形で展開されてきたが、その本質は、コミュニケーションにおける言葉の意味は、記号としての言語表現そのものにあるのではなく、その使用者にもたらされる効果であるという彼の指摘に遡ることが出来る。つまり、言語記号によってもたらされる推論的意味とは、基本的には言語使用者が捉える世界の事物や事象に結びついた理解であり、より複雑で推論が伴うコミュニケーションでは、それは会話の場やそれに関連する様々な知識や理解と間接的と結びつけることによりもたらされるものである。言い換えると、これは、コミュニケーションにおける意味とは、発話に関わる様々な知識と談話の文脈情報が参照点として機能することによって、言語記号に付与される現象であるとも言える。この場合、(3.4 で詳しく述べるように)参照点が導くターゲットは言語表現されておらず、参照点となる情報は別の何かの情報の理解を促進するのではなく、それによって何かの意味を同定（特定）する働きをする。従って、その参照点の機能は（所有表現やトピック表現の理解に働くタイプのものではなく）メトニミーや代名詞の理解の際の機能に相当すると考えられる。その場合の参照点は、先行発話、会話の場、関連知識といった既存の情報の他に、それ自体が聞き手の推論によって作られるものなど、様々なものがある。以下ではこれらの点について、特に関連性理論が主張する推論的意味解釈のメカニズムとプロセスを取り上げて論じる。

3.3.2. 関連性理論における推論的意味解釈の捉え方

上で述べたように、現在、推論的意味解釈、特に発話の具体的場面における文脈的意味解釈の研究に最も大きな影響力をもつのは、Sperber と Wilson の関連性理論である。関連性理論は、コミュニケーションを、(グライスの理論が依拠するといわれる)社会的原理ではなく、「関連性の原理」(principle of relevance)²⁰と呼ばれる認知的原理に依拠して、その推論モデルを一層発展させたものである。関連性の原理とは、人はコミュニケーションに於いて「関連性」(relevance)、特に(最小の労力で最大の効果を得る)「最適の関連性」(optimal relevance)を志向し、伝達するというものである。また、関連性とは、新情報が旧情報(文脈)と結合し、相手にもたらす「文脈的効果」(contextual effects)であると定義される²¹。

関連性理論の特徴は、特に発話の理解における文脈と推論の関与の重要性をより明確にしたことである。その一つは、Grice (1975)の提案では「文字通りの意味」(what is said)として扱われていた発話の明示的意味を、文の論理形式が持つ意味と、それを元に実際の発話の文脈から推論的に生まれる「表意」(explicature)に分けたことである。これは、文の論理形式にもとづく意味は様々な解釈が可能な(話者の意味を表すものとしては不完全な)意味的表示(semantic representations)であり、実際に解釈者の意識にのぼるのは、文脈情報をもとに想定(命題)として推論的に絞り込まれる思考の表示(=文脈的効果)であるという考えに基づく²²。彼らが示した表意の絞り込みプロセスには、「曖昧性の除去」(disambiguation) (e.g. I saw that gasoline can explode. における can の意味)や「指示対象の同定」(reference assignment) (e.g. It will get cold. における it が指すものの特定)の他、それまであまり議論されることがなかった「拡充」(enrichment) (e.g. Peter's bat is grey. における所有格表現の意味)が含まれる(Sperber and Wilson 1995: 184-188)²³。文脈情報が関与する表意は、その後、「飽和」(saturation) (Recanati 2001) (e.g. Mary is too old [for what?].), 「自由富化」(free enrichment) (Recanati 2001, Carston 2004) (e.g. Mary took out her key and opened the door [with the key].), 「アドホック概念構築」(ad hoc concept construction) (Carston 2004) (e.g. Mary is a bulldozer.)と呼ばれる概念などによって、その内容が深められてきた。

関連性理論の二つ目の主要な主張は、会話の含意の構築のメカニズムに関するものである。Sperber と Wilson は、会話の含意を、発話の論理的意味と文脈によって新しくもたらされた情報(新情報)(=表意)と既成の知識から構築される文脈の情報(旧情報)の結合によって生まれる「文脈的含意」(contextual implications) (=「推意」(implicature))であると捉える²⁴。これは、上述の関連性の基本的概念に基づくもので、それには更に二つの新たな指摘が含まれている。その一つは、この文脈的信息は、それ自体が(表意に対応して)解釈者の推論によって生成されるというものである。彼らはその文脈的信息を「推意前提」(implicated premises)と呼び、文脈的含意を「推意結論」(implicated conclusions)と呼んで区別する。二つ目は、推論的解釈の基本的メカニズムに関わる主張で、(表意と推意前提の結合によって生まれる)文脈的含意と

しての推意結論は、演繹的計算によって生成されるというものである。彼らは、我々の脳の中には語彙的情報（統語的、音韻的情報を含むもの）、百科事典的情報（事実、スキーマ、フレーム、スクリプト等）の他に、論理的情報が「概念」(concepts)として備わっており、文脈的含意を可能にするのは、中でも演繹的想定形成能力であると考えられる(Sperber and Wilson 1995: 86-93)。また、その演繹操作に関与するのは、「導入規則」(introduction rule)²⁵ではなく、「削除規則」(elimination rules)、とりわけ、別個の想定を入力としてその結合から結論が生まれる「総合的規則」(synthetic rules)であるとされる(Sperber and Wilson 1995: 63-117)。すなわち、文脈から生まれる会話の含意は、例えば、下の「肯定式」(modus ponendo ponens)と呼ばれるものに当てはめられ、発話によってもたらされる新情報（前提命題）と、文脈から得られる旧情報（条件的命題）の結合から推論によって導き出される (Sperber and Wilson 1995: 87)

²⁶。

入力： (i) P

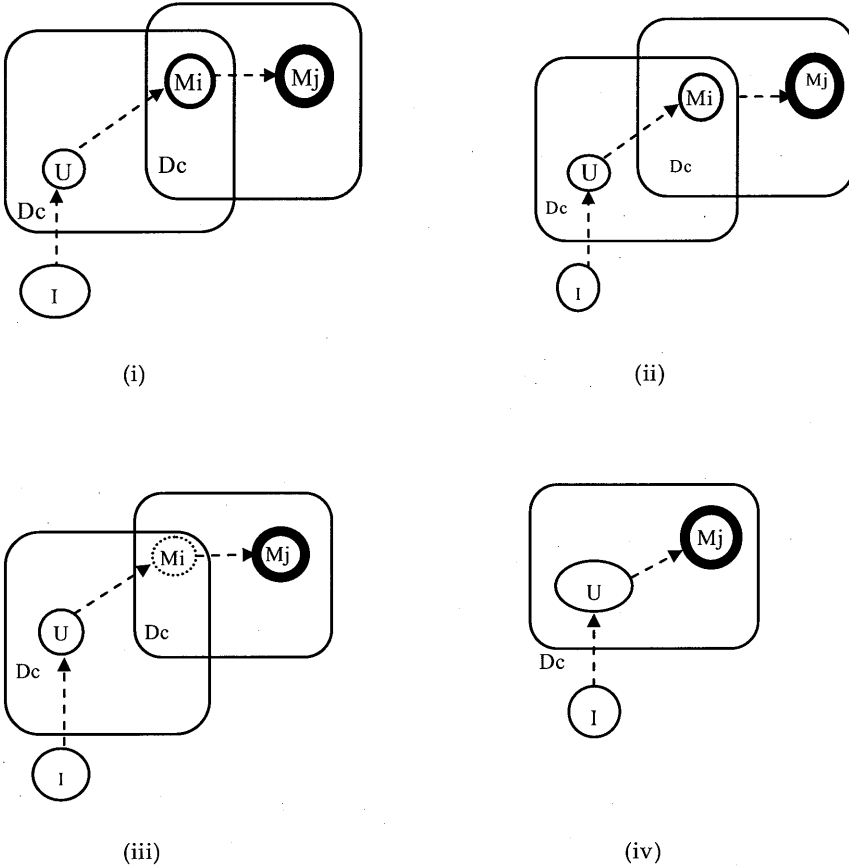
(ii) (もし P であれば Q)

出力： Q ²⁷

3.3.3. 参照点能力に基づく推論モデル

文脈に関わる多くの知的活動は、人間の脳が持つ「何かを手掛かりにする (=何かを参照する)」という基本的認知的能力 (=参照点能力) を用いて説明することが出来る。言語の意味は、言語記号以外の知識や情報との結び付けによって意味づけされるもので、特に発話の意味が推論を通して間接的に解釈される場合、文脈の関与は、その意味の間接性の大きさに比例して、より複雑で、大きいものになる。そのような発話の間接的な意味の解釈を、参照点の概念を用いて分析した先駆的研究に、山梨(2000, 2004)の「参照点起動の推論モデル」がある。このモデルは、メトニミーの他、言葉遊びや「間接発話行為」(indirect speech acts) (Searle 1969)などにおける、言語的、非言語的情報を参照点の概念で捉えることによって、発話の字義通りでない意味の解釈のメカニズムを説明するものである。例えば、間接発話行為としての、Could you open the window?では、その発話行為が成立するための「必要条件」(necessary condition)の一つである(聞き手はその行為を実行することが出来るかどうかという)「準備条件」(preparatory condition)を相手に尋ねる形で「依頼」という行為をする(Searle 1994 [1969]: 66-67)²⁸。この場合、疑問文によって表される準備条件は、話し手や聞き手が持つ、依頼という行為が成立するための一種の文脈的情報に相当し、聞き手はそれを手がかりに(すなわち参照)して依頼の意味を解釈すると説明される。これを、参照点のメカニズムを使って示したのが図2の(i)~(iii)である。図2の(i)は、解釈者(I)が、発話(U)を参照点として、文字通りの意味を示すドメインの中での疑問の意味(Mi)を通して、別の解釈ドメインで依頼の意味(Mj)をターゲットとして理解するメカニズムを示している。間接発話行為の意味は、次第に慣用化され、現在では、依頼の意味を表

す慣用句として用いられるようになっていく。(i)～(iii)は、疑問の意味(Mi)が次第に背景化されるプロセスを、(iv)は参照点としての意味が消失しその発話が直接依頼の意味を持つ表現が定着している状態を、示している²⁹。



I=解釈者; U=発話; Dc=ターゲット候補のドメイン; Mi=解釈の参照点としての意味; Mj=解釈のターゲットとしての意味

図 2. 参照点起動の推論モデル (山梨 2004: 93-94)

3.4. 参照点起動の推論モデルに基づく発話の含意の分析

参照点起動の推論モデルは、何か(際立った)別の情報を元に意図的意味が(伝達)解釈されるメカニズムを説明する原理であり、上で示した間接発話行為やメタファー・メトニミーに基づく決まり文句(例「亡くなる」、「働き手」)のような慣用表現の他、根源的には、談話におけるメタファーやアイロニーの解釈等、ダイナミックな推

論的意味理解にも当てはめることができる(山梨 2000: 116, 2004: 94-95)。また、そのプロセスには文脈と推論が関わることから、談話における発話の含意の説明にも当てはめることが出来る。ここでは、特に、関連性理論が提示する推論的意味解釈(=発話の含意)のメカニズムとプロセスを、参照点起動の推論モデルに基づいて分析する。

関連性理論における会話の含意を参照点起動の推論モデルに基づいて分析することについては、次のような根拠と意義があげられる。まず、上で述べたように、関連性理論は、現在の語用論研究において、推論的意味解釈のメカニズムの説明に関する文脈の関与を最も詳細かつ幅広く捉えものである。次に、この理論は人間が情報を処理する際に志向する「経済性」という特性に依拠している。すなわち、関連性理論は、下の引用が示すように、人は最小の労力で最大の効力の実現を志向する認知能力を持つという関連性の原理を発話の含意の説明の拠り所になっている。この特性は、ターゲットに対して顕著性と認知的接触の実現性の高いものを通して物事を理解するという参照点能力に基づく分析の考えと共通するものである。しかし、両者は推論的意味を全く異なるメカニズムで説明するものであり、その内容の比較・検討には意義がある。

Why assume that human cognition tends to be geared to the maximization of relevance? The answer come sin two stages, one to do with the design of biological mechanisms in general, the other with efficiency in cognitive mechanism. ... We start from the assumption that cognition is a biological function, and that cognitive mechanisms are, in general, adaptations. ...What we can expect is that, in general, an enduring biological mechanism with a stable function will have evolved towards a better cost-benefit balance, i.e. towards greater efficiency.

(Sperber and Wilson 1995: 261-262)

以下では、参照点起動の推論モデルに基づく含意の分析が、含意の理解のメカニズムとプロセスをより適切に説明し、いままでの分析の不十分さを補うことが出来ることを論じる。

3.4.1. 参照点に基づく表意の分析

関連性理論では、発話の含意(推意結論)は、文の論理形式が持つ意味を元に実際の発話の文脈から推論的に生まれる表意と、表意の命題と文脈から推論的に構築される命題の推意前提から(非論証的)演繹のプロセスによって導かれると主張する(3.3.2 参照)。ここでは、まず、その前者の部分について、参照点能力による解釈の分析を示す³⁰。

発話の論理的形式から表意の復元される課程では、発話の場面の情報の他、発話自体の言語情報が関わる。例えば、(1) b.の代名詞 I が直示的に Mary と解釈される(=指示対象の同定)場合、その指示物は発話の場面情報が一つの参照点となる(cf. Van Hoek 1992)。また、any に、強調的イントネーションが使われている場合、ピーターはその

パラ言語情報を参照点として、この表意命題が「断定」(assertion)であるという解釈(=高次表意)を得ることが出来る(注22参照)。このような解釈は、それぞれ、発話場面と代名詞による指示表現の関係、イントネーションの型と命題態度についての関係についての知識(=概念的原型)によって可能となる。

(1) a. Peter: Would you drive a Mercedes?

b. Mary: I would not drive ANY expensive car. (Sperber and Wilson 1995: 195)

表意の復元には、談話内の言語情報の他、その背景となる談話外の文脈的知識が大きく関わっていることが多い。(2)b.では、ケイは、ボールの発話の中の作曲者の名前(および自身の発話の情報(=Tosca))を参照点として、Puccini がオペラの作曲家プッチーニではなく、彼による歌劇トスカを指すと理解する。この場合(=指示対象の同定)には、作者-作品のメトニミー的关系と質問-応答という関係の知識が働く。

(2) a. Kay: Would you like to go to Tosca?

b. Paul: I'm not keen on Puccini. (Tanaka 1994: 31)

発話は殆どの場合がやりとりの「連鎖」(sequence)の中で起こり、解釈される。その場合、直前の発話だけでなく、それより以前の発話も文脈情報として表意の絞込みに使われる。例えば、(3)c.の代名詞 it は、その前の発話 (3)a.を参照点とすることにより、指示対象の同定が可能となる(cf. Van Hoek 1992)。

(3) a. Mary: Dinner is ready.

b. Peter: I'll be down in a few minutes.

c. Mary: It will get cold. (Sperber and Wilson 1995: 178 に基づく作例)

また、「cold の意味は、「寒い」ではなく「冷たい」を意味する」という、曖昧性の除去の判断にもこの情報がその参照点となっている。この場合、ターゲットと参照点をターゲットに結び付けるのは、発話のトピックと指示表現の関係、および、食事と温度の関係に関する知識である。ここで扱った(1)~(3)の表意をまとめると、次のようになる。

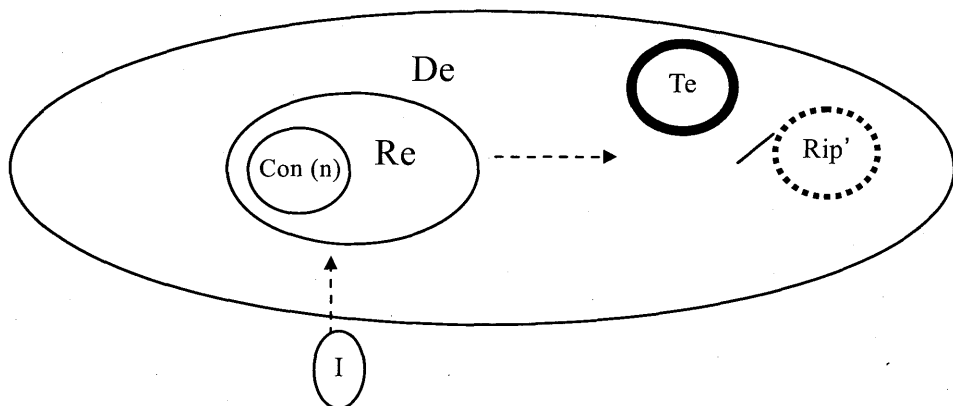
(1) b.' Mary would not drive any expensive car. (= (1)b.の「表意」)

(2) b.' Paul is not keen on Puccini's operas. (= (2)b.の「表意」)

(3) c.' The dinner will get cold very soon. (= (3)c.の「表意」)

表意のメカニズムを、参照点のメカニズムに基づいて示したのが、図3である。この図は、解釈者 (I) が、表意に関わる認知領域 (De) で様々な種類の複数個 (n) の

文脈情報 (Con) を参照点として、そのターゲットの命題 (=表意) に認知的接触を行うメカニズムを示している。



I:解釈; De:表意の認知領域; Con(n):文脈情報; Re:表意の参照点; Te:表意のターゲット; Rip':推移前提の参照点

図 3. 表意の参照点構造

また、この図は、参照点によって起動されたターゲットが、同時に、含意の前提的命題 (推意前提) の参照点としても機能することを示している³¹。表意の解釈に関与する参照点は、発話の具体的な場面や先行発話に関わるものであり、当該発話文には表現されていない。従って、ターゲットへの認知的繋ぎは、所有格表現やトピック表現 (および慣用化したメトニミー) における両者の関係と比較して、より間接的であると言える。

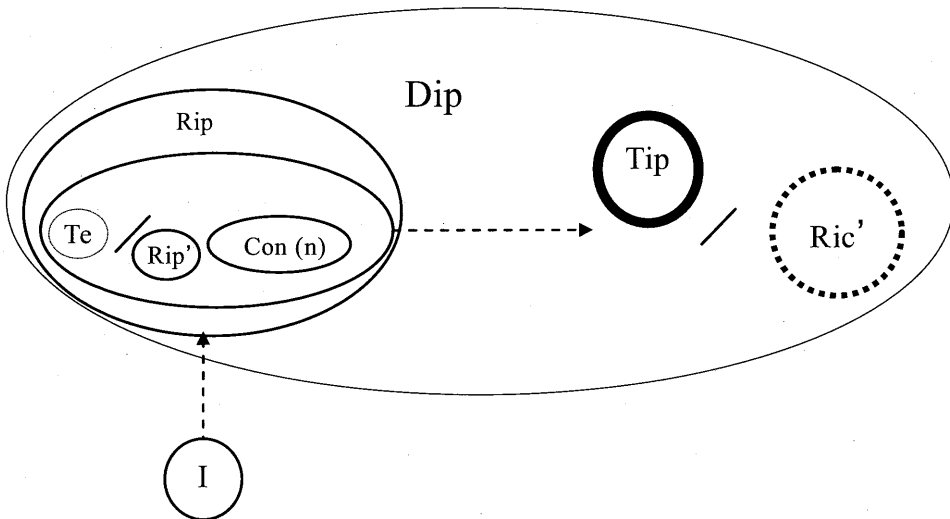
3.4.2. 参照点に基づく推意前提の分析

関連性理論では、表意は発話文の論理形式が持つ意味を元に、関連する文脈から推論的に生まれるのに対して、推意前提は、演繹的計算における条件の一つとして、それとは独立して推論的に構築される。しかし、実際には、そのような文脈情報が想定される際には、関連する文脈的知識だけでなく、相手の表意の意味や解釈者自身の発話もその手がかり (=参照点) として関わる。例えば、(1)b.についての推意前提を (4) とすると、ピーターはこの文脈的知識としての命題を入手するに当たっては、メルセデス (ベンツ) という車種の特徴についての自身の持つ百科辞典的情報を手がかり (=参照点) にしなければならない。しかし、その命題は、当然ながら、自身のメルセデスについての発話にも関係付ける (=参照する) ことによって初めて生まれる。同じことが、(2)b.、(3)c.についての推意前提としての (5)、(6)についても当てはまる。すなわち、(5)では、トスカというオペラについてのケイ自身の持つ百貨辞典的情報が、(6)

では、ピーターのメアリーがどのような状態で食べて欲しいかの情報が、手がかり(=参照点)となるだけでなく、同時に、質問をした彼ら自身の発話も、その手がかりになる。ここでは、(4)では高級車の範疇とメルセデスの車の関係を表す全体と部分(メンバー)の(包含)関係や、会話での質問に対する応答の関係についての知識がそのターゲットの同定に働く概念的原型として働く。

- (4) A Mercedes is an expensive car.
 (5) Tosca was composed by Puccini.
 (6) Mary wants Peter to eat dinner while it is hot.

図4は、(4)~(6)の例で示した文脈構築のプロセスを示したものである。この図は、推意前提の認知領域(Dip)で、解釈者(I)が、様々な文脈情報(Con(n))と表意(Te)を参照点として、そのターゲットの命題(推意前提)に認知的接触を行うメカニズムを示している。この図はまた、表意の場合と同様、そのターゲットが同時に含意の推意結論の参照点としても機能することを示している。このターゲットは、表意全体から直接構築されたものではなく、発話者(および解釈者自身の)発話情報(の一部)と他の参照点(百科事典的関連情報)との結合によってもたらされる点で、参照点の認知的関係付けの程度は、表意の構築の場合よりも間接的であると言える。



Dip:推意前提の領域; Te:表意のターゲット; Rip':表意に基づく推意前提の参照点; Rip:推意前提の参照点; I:解釈者; Re:表意の参照点; Tip:推意前提のターゲット; Ric':推意結論の参照点; Con(n):文脈の情報

図4. 推意前提の参照点構造

3.4.3. 参照点に基づく推意結論の分析

上で述べたように、関連性理論では、会話の含意の演繹操作に適用されるのは、複数の想定を入力としてその結合から生まれる規則 (=総合的規則) であり、その基本的なものが肯定式 (入力: (i)P、(ii) (もし P であれば Q); 出力: Q)、であるとされる (3.3.2)。ここでは、推意結論は表意の他、推意前提をその重要な手がかり (=参照点となる) として導かれる。また、これらの文脈情報の他に、実際には、推意前提と同様、やりとりにおける前の発話も参照点として大きく関わってくると思われる。更には、その文脈的知識には、これらの情報を総合的に関連付ける一般的シナリオとしての「スクリプト」(script)のような知識が、参照点として関与すると考えられる (cf. 野澤 2009)。上であげた、(1)~(3)では、それぞれ、(4)~(6)の、(1)b.'~(3)c.'、及び、複数の文脈情報が参照点となって、下のターゲット (7)~(9)が同定される。

(7) Mary does not drive a Mercedes.

(8) Paul would not go to Tosca.

(9) Mary wants Peter to come and eat dinner at once.

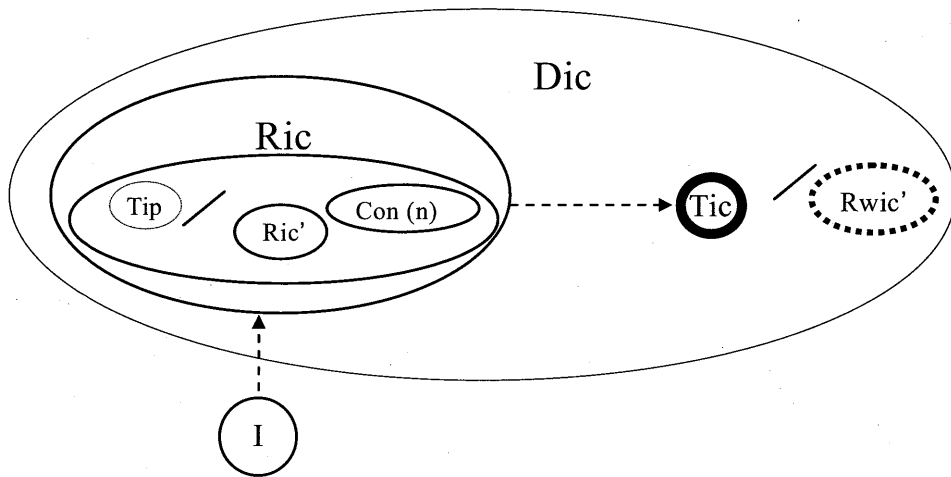
例えば、(9)の解釈には、ピーターは、「メアリーは食事がさめないうちに食べて欲しい」や、メアリーの発話から得られる「料理は直ぐさめてしまうよ」という想定他、その前のメアリーの「食事ができた」という発話がその参照点になっていると言える。また、この場合には、「その場の状況や理由の陳述が、「要請」(request)の発話行為になる」という言語的知識や、過去の経験に基づいて組織化され、構造化された「料理が出来ており、それが直ぐにさめるのなら、早く来て欲しいであろう」といったスクリプト的知識も関与していると考えられる³²。

ここで述べた推意結論の構築メカニズムを示したのが、図5である。ここでは、解釈者は、推意結論の認知領域で、推意前提から得られる情報と様々な文脈情報を参照点として、そのターゲットの命題 (推意結論) に認知的接触を行うことを示している。また、この図は、そのターゲットが、同時に、(10)~(12)に示すような、更なる「弱い会話の含意」(weak implicature)の参照点としても機能する可能性も示している。ここで述べたターゲットとなる推意結論は、その参照点となる情報が共に間接的情報によって得られたものであるという点で、参照点の「認知的関係付け」の程度は、最も間接的であると言える。

(10) Mary does not drive a Rolls Royce or Cadillac.

(11) Paul would not go to Madam Butterfly or Turandot.

(12) Mary wants Peter to know that she cooked something hot.



Dic:推意結論の領域; Ric':推意前提から得られた推意結論の参照点; Ric:推意結論の参照点全体; I:解釈者; Tip:推意前提のターゲット; Tic:推意結論のターゲット; Con(n):文脈的情報; Rwic':推意結論に基づく弱い推意結論の参照点

図5. 推意結論の参照点構造

3.5. 参照点分析に基づく発話の含意の分析の妥当性

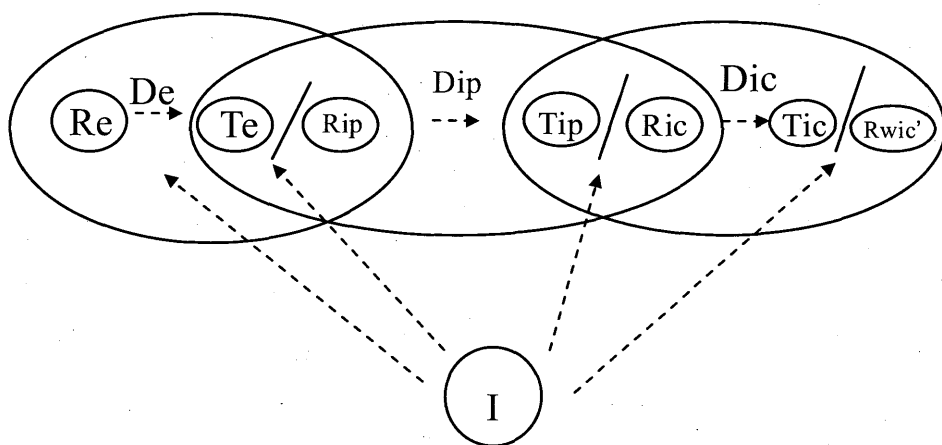
3.5.1. 原理的観点からの妥当性

関連性理論では、論理形式をもとに、先ず、表意が構築され、その表意をもとに高次表意が構築される。次に、そのように構築された高次表意と、それをもとに構築された推意前提を演繹の計算によって結合させることによって推意結論が構築される。このプロセスには全て推論が関わっているとされるが、その推論の特徴や性格については、明らかではない。もう一つの疑問は、解釈過程において、聞き手は、実際にいつもそのような厳密な順序と演繹の計算によって情報を処理するかどうかである。仮に、それが、殆ど無意識に近い状態で行われるとしても、その説明が心理的プロセスを表すものとして適切であるか、或いはもしそうでなければ、それがどのようにして起こるのかについては、しばしば議論されるところである³³。ここで示した参照点起動の推論モデルに基づく分析は、意味解釈のプロセスに関わるそれぞれの推論の特長を参照点とターゲットの間の繋がりから捉えることが出来るほか、そのプロセスは、必ずしもそうした連鎖的处理や演繹の推論メカニズムを前提とするものではない。以下では、これらの原理的な点について検討し、参照点起動の推論モデルの妥当性を示す。

先ず、関連性理論では、表意、推意前提、推意の同定は全て推論によって構築されるとする。しかし、しばしば指摘されるように、直感的に考えてもこの3つに関わる推論は、同じものとは言い難い。すなわち、例えば、表意の同定にかかわる情報処理の内容は、文全体ではなく文の部分に関わるものであり、また、量的にも、推意前提、

推意に比べるとその労力のはるかに小さい (cf. Recanati 2004)。ここで示した参照点起動の推論モデルに基づく分析では、様々な言語現象に見られる参照点からターゲットへの結びつけを、間接性の連続体として捉え (3.4.1~3.4.3 で述べたように)、情報処理の特徴を、その認知的関係付けの程度の差として説明することが出来る。

次に、表意、推意前提、推意結論のプロセスは、それぞれ、場合によっては意識され、相互に繋がりがあっても、この分析では必ずしも連鎖的なものとして捉える必要はない。すなわち、参照点に基づく分析では、それらは、並列的であり、選択的に使われると考える。発話の含意の場合、聞き手にとって最も重要で必要となるのは推意結論にあたる認知領域における情報処理である。その他の領域での情報処理は、それが自動的に行われる場合には、殆ど意識に上らず (=背景化され)、発話の文字通りの意味が基本になって含意が構築されるであろう。しかし、その処理が自動的でない場合は、その他の認知領域の情報が必要性に応じて並行して活性化 (=前景化) されることになると考えられる。このメカニズムを示したのが図 6 である。



Dic:推意結論の領域; Ric:推意結論の参照点; I:解釈者; Tip:推意前提のターゲット; Tic:推意結論のターゲット; De:表意の領域; Dip:推意前提の領域; Re:表意の参照点; Rip:推意前提の参照点; Te:表意のターゲット; Rwic':推意結論に基づく弱い推意結論の参照点

図 6. 推論プロセスにおける包括的参照点構造

最後に、それと関連することで、関連性理論が会話の含意の説明的原理とする演繹的メカニズムの妥当性について検討する。上で述べたように、関連性理論では、発話の含意は(それが最も単純な形をとる場合は)肯定式 (3.1.1.2 参照) に当てはめられる。例えば、(1)b. の場合、その推意結論は、「もしメアリーが高価な車を運転しないのなら、メアリーはベンツを運転しない」(=「もし P であれば Q」) という想定命題 (旧情報) と、メアリーの発話から得られた想定命題 (新情報) 「メアリーは高価な車を運

転しない」(=P)の合体から、「メアリーはベンツを運転しない」(=Q)が得られる。但し、最初の条件自体には「もしベンツが高級車であるならば」という(推意前提にあたる)もう一つの重要な仮定が含まれている³⁴。言い換えると、その場合、ピーターは、メアリーの発話を聞いた後に、「もしベンツが高価な車で、メアリーが高価な車は運転しない(と述べる)のなら、メアリーはベンツを運転しない」と仮定し、「先ほどメアリーは、高価な車は運転しないと述べたのであるから、メアリーはきっとベンツを運転しない」と結論付けることになるのかもしれない。しかし、このような複雑な計算は(特にこの例のように、その推意結論が比較的容易に導き出せる場合は)、時間的にも、認知的負担の観点からも経済的な方法とは言えない(cf. 中村 2002: 95)。しかも、上で述べたように、この含意の解釈するに当たって、多くの場合、最も必要とされるのは、推意前提へのアクセス(=参照)である。参照点起動の推論モデルに基づく発話の含意の分析では、この場合、ピーターに先ず必要なのは、メアリーの発話に基づく「メアリーは高価な車を運転しない」という理解から得られる「ベンツは高価な車の一種である」という部分と全体に基づく百科事典的知識あるいは関連知識によって部分的に推論によって得られる想定であると説明することが出来る(cf. Recanati 2004)³⁵。更に、ピーターは「一般に高価な車を運転しない人は、ベンツを運転しない」という経験的知識を参照することが出来る。このように、発話の含意は、演繹的推論ではなく、様々な文脈的知識を参照することにより構築されと考えることによって、より妥当な説明をすることが出来る³⁶(図6参照)。すなわち、そのプロセスは、心理的には総合的、選択的であり、論理的には、帰納的、再帰的な特徴を持つと言える³⁷。また、このことから、発話の含意の理解を含む言語処理は、(関連性理論で言う)言語部門、百科事典部門、論理的部門が別々のモジュールとして働くのではなく、一体となって遂行されると考えるのがより妥当と思われる。

3.5.2. 概念的観点からの分析の有用性

関連性理論が示す発話の含意の研究では関連性の原理という基本的認知原則に基づく原理的な分析が中心となっており、発話の言語表現やその形式の概念がその命題の生成や解釈にどのように関わるかについての詳細な検討がされることは殆どない(内海 2003: 156)。一方、認知語用論の貢献は、語用論研究が示してきた言語使用の原理のメカニズムとそのプロセスを一般認知能力の観点から説明することだけでなく、発話の文脈的意味と言語形式の関係を概念的観点からより詳細に検討する点にある(2.2参照)。以下では、参照点起動の推論モデルに基づく発話の含意の分析が、この点においてもより多くの深い知見をもたらすことを、先ずその認識的意味について、(1)~(3)の例で検討する。

(1) a. Peter: Would you drive a Mercedes?

b. Mary: I would not drive ANY expensive car. (Sperber and Wilson 1995: 195)

(2) a. Kay: Would you like to go to Tosca?

b. Paul: I'm not keen on Puccini.

(Tanaka 1994: 31)

(3) a. Mary: Dinner is ready.

b. Peter: I'll be down in a few minutes.

c. Mary: It will get cold.

(Sperber and Wilson 1995: 178 に基づく作例)

前節で述べたように、推意前提は、会話の含意が構築されるプロセスのなかでも特に重要な部分であると思われる。そのプロセスの出発点となるのが、発話によって参照点として焦点化（「プロファイル」(profile)）される概念であり、それはまた、聞き手がターゲットへの認知的接触を果たす上で最も顕著で効率的な概念でもある。例えば、(1)b.では、メアリーの発話で示された「高価な車」という概念が、その顕著性から、一つの参照点となり、その後、（ピーター自身の発話で使われた）「メルセデス」の概念と（全体-部分の関係で）結びつくことによって、「メルセデスは高価な車である」という別の参照点（推意前提）にアクセスされる。従って、もしメアリーがメルセデスは安価な車であるという知識を持っていて「安価な車」という表現を使えば、その参照点は別の内容となり、含意（推意結論）は、逆のもの（「メアリーはメルセデスを運転する」）になる³⁸。これは、メアリーが、メルセデスという車種に対して、その（顕著な）特徴をどのように捉えているかということと密接に関係することを示している。では、返答が、(1)b.、(2)b.、(3)c.であった場合はどうか。これらの場合、その参照点となる推意前提は、それぞれ例えば (4')、(5')、(6')のようなものになるが、その発話の含意自体は変わらない。

(1) b. " I would not drive ANY German cars.

(2) b. " I am not keen on Italian operas.

(3) c. " It's getting late (for the concert).

(4') Mercedes is a German car.

(5') Tosca is an Italian Opera.

(6') Mary wants to eat dinner early (for she wants to go to a concert after that).

しかし、同じ含意であっても、それが伝える付加的意味（(1)b.の場合「それはドイツ製の車であるから」という理由に基づくもの）は同じではない。また、従って、発話においてどのような概念がプロファイルされるかは、更なる含意（=弱い推意）の内容とも結びついている。すなわち、(1)b.、(2)b.、(3)c.が使われた場合には、そのような含意は、それぞれ、(10)、(11)、(12)ではなく、(10')、(11')、(12')のようなものになる。

(10) Mary does not drive a Rolls Royce or Cadillac.

(11) Paul would not go to Madam Butterfly or Turandot.

(12) Mary wants Peter to know that she cooked something hot.

(10') Mary does not drive a Volkswagen.

(11') Paul is would not go to Un Re in Asciolto.

(12') Mary wants Peter to know that she will start eating dinner by herself.

これは会話の含意が、発話によって参照点としてプロファイルされる概念の認知領域の「フレーム(frame)」(及び関連の文脈情報)を元に決定付けられることを示している。このように、参照点起動の推論モデルによる発話の含意の分析では、そのプロセスについて、より妥当性の高い説明を提供するだけでなく、含意自体の特性と内容をより詳細且つ明示的に示すことが出来る。

発話の含意は、一般の発話の意味と同様、認識の意味だけでなく、発話者の信条、態度、感情といった情意的な意味も伝達する。参照点起動の推論モデルの適用はそのような発話の含意の情意的意味の分析においても有効であると言える。例えば、(1)で、メアリーが、環境汚染問題に対する意識の高い人物であることを暗に伝えたい場合、(1)b.の代わりに (1)b.′′′のような返答をすることが考えられる。

(1) b.′′′ I don't drive cars that aren't environmentally friendly.

ここでは、その発話から想起される「環境に優しい車」という参照点概念は、百科事典的知識により、メルセデスという車種と結びつくことから、その含意(推意結論)は、(1)b.の返答の場合と同じである。しかし、その理由を表す付加的な情意的意味や、更なる含意については、同じではない。すなわち、その場合の弱い推意は(10)や(10′)のようなものでなく、(13)のようなものになると考えられる。

(13) Mary would not drive a diesel car.

メアリーの返答は、自身の感情とも関連する。例えば、もし、メアリーが、ドイツ(人)に対して、好ましい感情を抱いていない場合、(1)b.′′′のような返事をするかもしれない。その場合、その返答は (10′′)のような弱い含意を生む可能性がある。更に、もし、メアリーが相手に対して、高い車を買うだけの余裕がないと知られてもかまわないと思っている場合は(1)b.の返答が想定されるが、それが知られては困る場合は、そのような返答はしないかもしれない。それは、(1)b.であれば、(10′′′)のような弱い含意も生み出す可能性があるからである。

(10′′) Mary does not like to purchase any German goods.

(10'') Mary is financially so desperate she cannot afford traveling overseas.

このように、発話の含意の情意的意味は、その認識的な意味と同様、話者が発話によって参照点として選ぶ概念フレーム（及び関連の文脈情報）と深くつながっている。参照点起動の推論モデルによる発話の含意の分析は、この種のつながりを指摘することが出来る点においても有用であると言える。

4. 終わりに

本稿では、言語使用のダイナミックな現象を文脈との関係から包括的・多角的に捉える語用論と、人間の一般的な認知能力と言語主体の経験的基盤に照らしながら、言語形式の概念的意味を厳密に分析する認知言語学の二つを融合する認知語用論の研究の重要性を提示した。認知語用論には、語用論が示してきた問題を認知言語学観点から再検討するものと、認知言語学の問題を語用論の方法論や知見を用いて深める二方向からの研究が可能であるが、本稿では、前者についての貢献に焦点を当て、その原理的な側面と意味的な側面から検討した。すなわち、ここでは、語用論の主要研究テーマの一つである発話の含意を参照点起動の推論モデルによって分析し、そのメカニズムが、その推論プロセスに対してより妥当性の高い説明を提供するだけでなく、含意自体の特性と内容を、より詳細且つ明示的に示すことが出来ることを示した。参照点現象は、発話の含意の他、比喩表現や、アイロニー等の非字義的表現の解釈を始め、多くの談話レベルの語用論現象をより深く捉えなおすことを可能にすると思われる³⁹。今後は、そのような現象についての更なる研究の他、他の一般認知能力にも照らした幅広い研究が更に必要であり、特に知・情・意の全てに関わる言語現象を包括的、総合的に捉えた研究を進めて行くことが重要であると思われる。

注

¹ 本稿は、京都言語学コロキウム第6回年次大会（2009年8月29日（土）於 京都大学）での口頭発表の内容を加筆修正したものである。

² 「プラグマティクス」(pragmatics)という用語の定義を始めて使ったのは Morris (1938)で、彼は記号論の立場からそれを統語論(syntagmatics)、意味論(semantics)と区別すると同時に、その研究範囲を言語記号の機能と共起する心理的、社会的、生物的现象を含む広範囲に亘るものであるとした。現在語用論研究の捉え方には、(本文で示したような)言語現象の機能的側面を包括的に研究する「パースペクティブの観点」(perspective view)と、それを音韻論、統語論、意味論と並列する一つの言語学の独自の分野として捉えその研究範囲を含意、前提、発話行為、直示などの言語使用の現象に限定する「構成要素の観点」(component view)がある。前者は、「ヨーロッパ大陸学派」(Euro-continental school)の考えであるのに対して、後者は「イギリスアメリカ学派」(Anglo-American school)の考えであるとされる(Huang 2007: 4)。

³ 認知語用論という用語は、他の認知的語用論研究、特に関連性理論を指して、用いられることがある(c.f. 林 2002)。

⁴ Lakoff (1990: 41)は、下の引用が示すように、通常この二つは融合するが、そうでない場合には、認知的考察が優先されるとしている。

If we are fortunate, these commitments will mesh; the general principles we seek will be cognitively real. If not, the cognitive commitment takes priority; we are concerned with cognitively real generalizations.

⁵ 詳しくは、次のように説明されている。

Because cognitive linguistics sees language as embedded in the overall cognitive capacities of man, topics of special interest for cognitive linguistics include: the structural characteristics of natural language categorization (such as prototypicality, systematic polysemy, cognitive models, mental imagery and metaphor); the functional principles of linguistic organization (such as iconicity and naturalness); the conceptual interface between syntax and semantics (as explored by cognitive grammar and construction grammar); the experiential and pragmatic background of language-in-use; and the relationship between language and thought, including questions about relativism and conceptual universals. (Geeraerts 1995: 111-112)

⁶ 詳細は、林(2009)を参照。

⁷ 後者については、更に、語用論が示してきた記号の使用効果のプロセスに関する原理とメカニズムを、言語主体の認知能力の観点から説明する研究と、文脈における意図の表出・解釈と言語形式の関係を記号の範疇的・概念的意味の観点からより詳しく検討する研究に分けることが出来る。

⁸ 語用論と意味論の関係については、それを融合的なものとする立場(reductionism)と、補完的なものとする立場(complementarism)があり、認知意味論は、それ自体前者に属するとされる(Huang 2007: 210)。「認知語用論」は中でも、語用論寄りのものと言える。

⁹ 日常生活では、この能力は、例えば、北斗七星を後ろにたどりながら、北極星を見つける場合のように意識的な場合もあるが、アルファベットを前の文字に続いて暗記で言うときや、コンピュータの本体を見てからそのスイッチを入れるときのようにはっきりと意識しない状態で働くことが多い(Langacker 1993: 5)。Langacker (1993: 35)は、参照点構造は一つの極めて基本的な認知能力であり、それが関わらない言語現象は無いであろうと述べている。

¹⁰ 参照点に関わるとされる文法現象には様々なバリエーションが指摘されている。例えば、所有表現には、パパゴ語(Papago)の並置構文(e.g. huan kii (ART Juan house) 'Juan's house'), フランス語の直接目的語表現(e.g. J'ouvre la bouche. 'I open my mouth'), 英語の前置詞的目的語(e.g. I tapped her on the shoulder.)のように所有関係が明示的に言語表現されず潜在的に活性される場合もある(Langacker 1993: 19-24)。またトピック表現には、談話に於ける複数の文の参照点としてプロファイルされるものもある(e.g. Our Vacation may be a problem. There won't be anyone to feed the cats. The lawn has to be cut. The mail and newspapers have to be stopped. (Langacker 1993: 24)、「春はあけぼの、やうやうしろくなり行く 山際すこしあかりて 夏はよる 月の頃はさらなり」(山梨 2000: 98))。更に、代名詞の参照点は通常は文脈や場面の事物や事象を指すのに対して、It is a story about {myself, *himself, *herself}のような再起代名詞の用法では、話し手の起点である「グラウンド」

(ground) がその探索領域を起動する参照点になっているとみなすことが出来る(山梨 2000: 94-95)。

- 11 イメージスキーマと概念的原型の関係についての他の例としては、スキニングのイメージスキーマと物理的動きについての理解、包摂のイメージスキーマと入れ物とその内容物についての理解などである (Langacker 1993: 4)。
- 12 例えば「ハーブティはカモミールが好きだ。」では、参照点となるトピック表現 (とその関係を表すマーカー「は」) がプロファイルする概念は、客観的状况において存在してターゲットとつながっているモノではなく、話者の主観によって作り上げられたもので、(カモミールより) 上位で広範囲の (ハーブティという) カテゴリー的概念である。
- 13 メトニミーで参照点となるのは、何らかの関係によって生じる際立ちがあるものである。例えば、*My pencil broke.* では、全体と部分の関係によって *pencil* が選ばれ、*I need some wheels so I can go to the drive-in.* では、そのものの際立ちや文脈上の機能によって、*some wheels* が選ばれる (Langacker 1993: 29-30)。
- 14 代名詞の照応において、先行詞は代名詞の参照点として機能し、その参照点の領域は代名詞が解釈される文脈を提供するとされる (Van Hoek 1992、山梨 2000, 2004)。代名詞の用法で参照点能力に関わるのは、*Tom likes his mother. Jenny put the kitten in its box.* (Langacker 1997: 262-263) のような節内での用法や、「父は娘 *i* を呼んで彼女 *i* の話を聞いた。」(山梨 2000: 92) のように複数の節にまたがる場合の他、複数の文やパラグラフをまたがる場合もあり、その間接性の程度には差がある。
- 15 この点に関して、Langacker は、次のように述べている。

Conceptual structure emerges and develops through processing time; it resides in processing activity whose temporal dimension is crucial to its characterization.

(Langacker 1997: 249)

...consider the accusation that cognitive semantics-owing to the fixed static nature of concepts-cannot accommodate the dynamicity of actual language use: rather than being fixed, the values of linguistic elements are actively negotiated; and rather than being static, the meanings of complex expressions emerge and develop in discourse. Though frequently made, this accusation is groundless.

(Langacker 2008: 30)

- 16 Grice (1957) は、*X means P* という文を用い、自然的意味が *P* を含意するのに対して、非自然的意味は *P* を含意しないとした。例えば *Those spots meant measles.* では、はしかにかかっていることは否定できないため前者の意味に当たり、*These three rings on the bell mean that the bus is full.* ではバスが満員ではないのに車掌が間違っただけを 3 回鳴らしたとも言えるため *P* を含意せず、後者の意味となる。このような言語記号の意味の捉え方は、記号と意味の関係は使用の文脈において慣用によって定着したシンボリックなものに見えず認知言語学の立場とも通じる。
- 17 Levinson (1983: 16) は Grice の非自然的意味の定義を次のようにまとめている。

S meant-nn z by uttering U if and only if:

(i) *S intended U to cause some effect z in recipient H*

(ii) *S intended (i) to be achieved simply by H recognizing that intention (i)*

これは、特に、言外の意味としての後者の意味を説明する上での説明的基盤となるものであるが、それ以前に記号論学者 Morris (1938) が述べた、「表そうとする何か (designatum) についての「(解釈的) 意味」 (interpretant) は、「仲介物」 (mediator) としての記号媒体 (sign vehicle) を通して解釈者 (interpreter) が受ける「効果」 (effect)

である」という主張と重なる。更にこの概念は、後の「間接発話行為」(indirect speech act)(Austin 1962)の「発語媒介行為」(perlocutionary effects)や後述の関連性理論の「文脈効果」(contextual effects)の概念においても援用されている。

- ¹⁸ Griceの示した会話の含意の生成メカニズムは Searle (1979: 30-57)の間接発話行為の解釈の説明にも用いられている。
- ¹⁹ 中でもその後の研究に影響を及ぼしたのは、含意を、量、関係、に関する二つの原理によって表した Horn (1984)と、その不備を修正し、量、情報、様態に関する3つの原理を使って表した Levinson (1987)の研究である。Horn (1984)の「Q原理」(Q[quantity]-principle)は、Grice (1975)の「量の公理」(maxim of quantity)の第一原則(出来るだけ多く)と「様態の公理」(maxim of manner)の第一(明瞭に)、第二原則(曖昧なく)に対応し、「R原理」(R[elation]-principle)は、Grice (1975)の「量の公理」の第二原則(できるだけ少なく)、「関係の公理」、「様態の公理」の原則3(簡潔性)と原則4(順序)に対応する。一方 Levinson (1987)の、「Q原理」(Q[uality]-principle)(不十分なく)は、Grice (1975)の「量の公理」の第一原則に、「I原理」(I[nformativeness]-principle)(必要なだけ)は、Grice (1975)の「量の公理」の第二原則に、M原理(特異な状況には特別な表現を)は Grice (1975)の「量の公理」の第一原則と「様態の公理」の原則4に対応する。
- ²⁰ 関連性の原理は、人間の生物的特徴から生まれるより根本的で一般的とされる「認知の原理」(the principle of cognition)と、特に Grice の協調の原理に代わるものとされる「コミュニケーションの原理」(the principle of communication)の二つの部分からなり、それぞれ次のように定義される。
- (1) Human cognition tends to be geared to the maximization of relevance.
- (2) Every act of communication communicates a presumption of its own optimal relevance.
(Sperber and Wilson 1995: 260)
- ²¹ 文脈的効果には、他に、「既存情報の強化」(strengthening of contextual assumptions)と、「既存情報の排除」(cancellation of contextual assumptions)があるとされる(Sperber and Wilson 1995: 72-74)。
- ²² 表意には、命題の意味を表すものの他に、その内容が陳述か疑問かなどの法性(modality)や断定か、比喩か皮肉かなどの命題態度(propositional attitudes)等を表す「高次表意」(high-level explicatures)と呼ばれるものがある(Sperber and Wilson 1995: 180, 224-254)。
- ²³ 彼らは表意における拡充の必要性について、所有格表現の解釈を例に、次のように説明している。

Peter's bat' might refer to the bat owned by Peter, the bat chosen by Peter, the bat killed by Peter, the bat mentioned by Peter, and so on indefinitely. It is hard to believe that the genitive is ambiguous, with as many senses as there are types of relationship it may be used to denote, or that all these relationships fall under a single definition which is the only meaning expressed by use of the genitive on any given occasion. It seems, rather, that the semantic interpretation of a sentence with a genitive from which ambiguities and referential indeterminacies have been eliminated is still something less than fully propositional. Contextual information is needed to resolve what should be seen as the semantic incompleteness, rather than the ambiguity, of the genitive.

(Sperber and Wilson 1995: 188)

- ²⁴ ここで、新情報を P、旧情報を C、文脈的含意を Q とすると、それらは、それぞ

れ次のような特徴を持つとされる。

A set of assumptions P *contextually implies* an assumption Q in the context C if and only if

(i) the union of P and C non-trivially implies Q.

(ii) P does not non-trivially imply Q.

(iii) C does not non-trivially imply Q. (Sperber and Wilson 1995: 107-108)

²⁵ 導入規則とは (P and P), (P or Q), (not (not P)) のように、何かを付け加えたものから成る規則で、その出力が元の想定 P の伴立(entailment) となるようなものである (Sperber and Wilson 1995: 95)。

²⁶ Sperber と Wilson は下の引用が示すように述ベグライズ流の多くの語用論的理論は非形式的な演繹システムであり、その詳細は明らかにされてこなかったとしている。尚、このメカニズムが表意にも適用されるのかどうかについては述べられていない。

To the extent that deduction has been considered at all in the pragmatic literature, it has been tacitly modeled on informal(natural)deduction systems of the type familiar from introductory logic texts.... Typically, no instructions are given about how the rules are to be applied, in what order, or to what set of assumptions as premises...Despite the widespread skepticism about the role of deductive reasoning in comprehension, many existing pragmatic theories, especially those built on Gricean lines, seem to be based on informal systems of just this type.... An informal system thus leaves an important part of the deductive process unspecified: it is left to the intelligent user of the system to decide how best to exploit it. (Sperber and Wilson 1995: 93)

²⁷ しかし、3.5.1 で述べるように、発話の含意がこのような複雑なメカニズムを経て形成されるとは考えがたい。以下に示すように、発話の含意は、様々な文脈情報を参照することで推論的に同定されると考えられる(注 34 参照)。

²⁸ この条件は、Searle (1965)が、Austin (1962)の「適切性条件」(felicity condition)を発展させて提案したもので、特定の発話行為が成立するために満たさなければならない「構成規則」(constitutive rules)であるとされる。それには、他に、「命題内容条件」(propositional condition)、「誠実条件」(sincerity condition)、「本質条件」(essential condition)が含まれる。

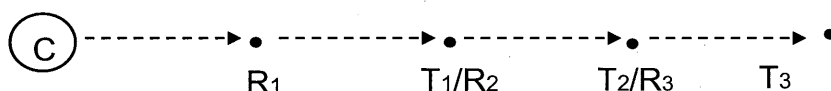
²⁹ また、ここでは、その推論のメカニズムは、(関連性理論が主張するような) 演繹的なものではなく、発見的なものであるとされる。すなわち、その推論的結論は、文脈情報(P→Q)と発話に基づく新情報(P)の二つの前提からその帰結(Q)が導かれるのではなく、文脈情報(P→Q)と発話に基づく新情報(Q)から、前提としての先件が、暫定的に、推論される。これを上の例に当てはめると、そのプロセスは、「疑問文の発話であるなら依頼を表す」(P→Q)と「疑問文の発話である」(P)から「依頼である」(Q)という解釈が(必然的に)得られるのではなく、「依頼であるなら(必要条件の一部である)疑問文の発話が使われることがある」(P→Q)という知識と、「疑問文の発話である」(Q) (およびその発話の状況等) から判断して、「それは依頼かもしれない」(P)を見つけ出すと説明される。この発見的プロセスは次のようにあらわすことが出来る。(山梨 1986: 88-148; 1988: 117-120)

入力: (i) Q

(ii) (もし P であれば Q になることがある)

出力: P かもしれない。

- ³⁰ 例えば、(1)では、メアリーの表意、Mary would not drive ANY expensive car. が、推意前提 Mercedes is an expensive car. と結合され、推意結論(=会話の含意): Mary would not drive a Mercedes. が生まれる。
- ³¹ このように、ターゲットが別の参照点になるというメカニズムについては、Langacker (1993: 26-27)は、The Lexicostatistics Museum is across the plaza, through that alley, and over the bridge.のような文や、Tom's girlfriend's cousin's mother. My computer's warranty's expiration data.のような文の例を挙げ、それを下の図で表している。このような場所格構文や所有格構文では、何れの場合も、参照点とターゲットは空間に占める場所を表すが、Langacker (1993: 28)は、このメカニズムは、人や、物理的モノの他、より抽象的なものにも当てはまると述べている。



- ³² このような知識は、範疇相互の関係や出来事の連鎖など広範囲にわたり、「フレーム」(frame)、「スキーマ」(schema)、「スクリプト」(script)と呼ばれる。
- ³³ この点について、内海 (2003: 155)では、次のように指摘している。
「確かに、関連性理論ではこのような手順(論理形式→表意→高次表意→推意)に沿って解釈が進行するように見受けられるが、必ずしもそのような主張はしていない。たとえばウィルソンは “These tasks (constructing explicatures, implicated premises and implicated conclusions) are not sequentially ordered, but performed in parallel, using the relevance-theoretic comprehension procedure (Wilson 2002: 7)” と述べている。しかしこの主張に関してはこれ以上の説明はなく、並行して処理されるといっても、それらがどのように並行しているのか、並列処理で関連性の算出が果たして可能なかなどの問題点は依然として残るであろう。」
- ³⁴ 従って、その演繹的説明には、より正確には、「連言肯定式」(conjunctive modus ponens) (入力: (i)もし (P 且つ Q) ならば R, (ii) P ; 出力: もし Q ならば R) に沿ったプロセスが当てはまると思われる。
入力: (i): Mary does not drive an expensive car (P)
(ii): If [Mary does not drive an expensive car (P) and a Mercedes is an expensive car (Q)], Mary does not drive a Mercedes(R).
出力: If Mercedes is an expensive car(Q), Mary does not drive a Mercedes(R).
- ³⁵ Recanati (2004)は推意前提は推意の伝達に必要な媒介物に過ぎないとみなす。
- ³⁶ この点については Recanati (2004)の「文脈主義」(contextualism)や「利用可能性」(availability)の概念を参照。
- ³⁷ このような推論プロセスは「アブダクション」(abduction)と呼ばれるものに近いと考える。
- ³⁸ メアリーがメルセデスを安価な車と勘違いしていた場合、発話によって「高価な車」という概念をプロファイルすることはまれであろう。
- ³⁹ 林 (2009)では、その可能性として、参照点を用いた「レトリック構造理論」(rhetorical structure theory ([RST]) (Mann and Thompson 1987, 1988)の分析、「事態把握」(construal)の原理にもとづく「視点」(point of view)(Kuno and Kaburaki 1977, 久野 1978)の分析をあげている。また、山梨 (2009b)では認知語用論の観点から、従来の法論と意味論の研究領域を越える言語学の新たな研究の方向づけとして、文法、論理、レトリックに関わる幅広い言語現象を分析している。

参考文献

- Austin, John L. 1962. *How to Do Things with Words*. Massachusetts: Harvard University Press.
- Carston, Robyn. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Massachusetts: Blackwell.
- Carston, Robyn. 2004. Relevance Theory and the Saying/Implicating Distinction. In Larry Horn, R. and Ward Gregory (eds.), *The Handbook of Pragmatics*, 633-91. Oxford: Blackwell.
- Coulson, Seana. 2001. *Semantic Leaps: Frame-shifting and Conceptual Blending in Meaning Construction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Deane, Paul D. 1995. Metaphors of Center and Periphery in Yeats' Second Coming. *Journal of Pragmatics* 24(6): 627-642.
- Fauconnier, Gilles. 1985. *Mental Spaces: Roles and Strategies*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- Geeraerts, Dirk. 1995. Cognitive Linguistics. In Jef Verschueren, Jan-Ola Östman, Jan Blommaert (eds.), *Handbook of Pragmatics*, 111-116. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamin.
- Gibbs, Raymond. 1994. *The Poetics of Mind: Figurative Thought, Language, and Understanding*. Cambridge/New York: Cambridge University Press.
- Grice, Paul H. 1957. Meaning. *Philosophical Review* 66: 377-88.
- Grice, Paul H. 1975. Logic and Conversation. In Peter Cole and Jerry L. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics 3, Speech Acts*, 41-58. New York: Academic Press.
- Hayashi, Reiko. 2008. Structures Interacting with Metaphor: Gender Metaphor across Texts. *Studies in Pragmatics* 1: 80-93.
- Hayashi, Reiko. 2009. *Women, Radish, and White Things: Dynamics of Discourse Metaphor Co-constructed in Conversation*. Paper Presented at the 11th International Pragmatics Conference, at the University of Melbourne, Victoria.
- 林宅男. 2002. 「言語使用の認知的研究」 高原脩・林宅男・林礼子『プラグマティックスの展開』77-12. 東京: 勁草書房.
- 林宅男. 2006. 「認知語用論の展開 —参照点能力と推論」 上田功・野田尚史(編)『言外と言内の交流分野』471-486. 東京: 大学書林.
- 林宅男. 2009. 「認知語用論」の理論的基盤とその方向性について』『総合研究所紀要』34(3): 63-82. 桃山学院大学総合研究所.
- Hayashi, Takuo. 2009. *Towards Advancing 'Cognitive Pragmatics' —An Analysis of Indirect Talk from the Perspective of Reference Point*. Paper Presented at the 11th International Pragmatics Conference, at the University of Melbourne, Victoria.
- Horn, Laurence. 1984. Towards a New Taxonomy for Pragmatic Inference: Q- and R-based Implicature. In Deborah Schiffrin (ed.), *Meaning, Form, and Use in Context*, 11-42. Washington DC: Georgetown University Press.

- Huang, Yan. 2007. *Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press.
- Kuno, Susumu, and Etuko Kaburaki. 1977. Empathy and Syntax. *Linguistic Inquiry* 8(4): 627-672.
- 久野暉. 1978. 『談話の文法』 東京: 大修館.
- Lakoff, George. 1971. On Generative Semantics. In Danny D. Steinberg and Leon A. Jakobovits (eds.), *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*, 232-296. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George. 1990. The Invariance Hypothesis: Is Abstract Reason Based on Image-schemas? *Cognitive Linguistics* 1(1): 39-74
- Lakoff, George, and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live by*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George, and Mark Turner. 1989. *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. I. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald. 1993. Reference-point Constructions. *Cognitive Linguistics* 4(1): 1-38.
- Langacker, Ronald. 1997. A Dynamic Account of Grammatical Function. In Joan Bybee, John Haiman, and Sandra A. Thompson (eds.), *Essays on Language Function and Language Type*, 249-273. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald. 2008. *Cognitive Grammar — A Basic Introduction*. New York: Oxford.
- Lee, David. 2001. *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levinson, Stephen C. 1987. Minimization and Conversational Inference. In Jeff Verschueren and Bertuccelli Papi, Marcella (eds.), *The Pragmatics Perspective*, 61-129. Amsterdam: John Benjamins.
- Mann, William C., and Sandra Thompson. 1987. Rhetorical Structure Theory: A Framework for the Analysis of Texts." *IPRA Papers in Pragmatics* 1: 70-105.
- Mann, William C., and Sandra Thompson. 1988. Rhetorical Structure Theory: Toward a Functional Theory of Text Organization. *Text* 83: 243-281.
- McCawley, James. 1976. *Syntax and Semantics 7: Notes from the Linguistic Underground*. New York: Academic Press.
- Morris, Charles. W. 1938. *Foundations of the Theory of Signs*. Chicago: University of Chicago Press.
- 中村芳久. 1993. 「Neo-pragmatics: Beyond neo-Gricean Pragmatics — 語用論の問題・認知意味論による解法—」『金沢大学文学部論集』13: 77-107. 金沢大学文学部編.
- 中村芳久. 2002. 「認知言語学から見た関連性の問題点」『語用論研究』4: 85-102.

- 西田谷洋. 2006. 『認知物語論』 東京: ひつじ書房.
- 野澤元. 2009. 「フレーム・スクリプトと語用論的理解」 日本英文学会関西支部第4回大会 英語学ワークショップ口頭発表資料.
- Postal, Paul. 1972. The Best Theory. In Stanley Peters (ed.), *Goals of Linguistic Theory*, 131-170. New Jersey: Prentice Hall.
- Recanatì, François. 2001. What is Said. *Synthèse* 125: 75-91.
- Sakita, Tomoko. 2002. *Reporting Discourse, Tense and Cognition*. Amsterdam: Elsevier.
- Seale, John R. 1965. What is Speech Act. In Max Black (ed.), *Philosophy in America*, 221-239. Ithaca: Cornell University Press.
- Searle, John R. 1994 [1969]. *Speech Acts*. London: Cambridge University Press.
- Searle, John R. 1979. *Expressions and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1995 [1986]. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Wiley-Blackwell.
- Stockwell, P. 2002. *Cognitive Poetics: An Introduction*. London: Routledge.
- Sweetser, E. 2000. Blended Spaces and Performativity. *Cognitive Linguistics* 11 (3/4): 305-333.
- Tanaka, Keiko. 1994. *Advertising Language: A Pragmatic Approach to Advertisements in Britain and Japan*. London: Routledge.
- Turner, Mark. 1996. *The Literary Mind*. New York: Oxford University Press.
- 内海彰. 2003. 「認知言語学や関連性理論は文学の認知研究に貢献できるか? 認知システムとしての文学—ワークショップのディブリーフィング—」, 小方孝 (編) 『日本認知科学会テクニカルレポート』 46: 150-158.
- Van Hoek, Karen A. 1992. *Path through Conceptual Structure: Constraints on Pronominal Anaphora*. Ph. D. dissertation, University of California, San Diego.
- Verschueren, Jef. 1995. The Pragmatic Perspective. In Jef Verschueren, Jan-Ola Östman, Jan Lommaert (eds.), *Handbook of Pragmatics*, 1-19. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamin.
- Wilson, Deirdre. 2002. *Relevance Theory: From the Basics to the Cutting Edge*. Paper read at ICU open lectures on cognitive pragmatics, International Christian University.
- 山梨正明. 1986. 『発話行為』 東京: 大修館書店.
- 山梨正明. 1988. 『比喩と理解』 東京: 東京大学出版.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 東京: くろしお出版.
- 山梨正明. 2001. 「認知語用論」 小泉保 (編) 『入門 語用論研究—理論と応用』 179-194. 東京: 研究社.
- 山梨正明. 2004. 『ことばの認知空間』 東京: 開拓社.
- 山梨正明. 2009a. 『認知構文論 —文法のゲシュタルト性』 東京: 大修館書店.
- 山梨正明. 2009b. 「認知語用論からみた文法・論理・レトリック」 『語用論研究』 11: 61-96.